
ヨルのデンシャ

ホコサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨルのデンシャ

【Nコード】

N1942Z

【作者名】

ホコサキ

【あらすじ】

私は沈黙の空間のなか、椅子に沈むように座り込んでいた……。

第1

「……………」

その空間に音が無いことに、私はなかなか気付かなかった。それほど私の意識がはつきりするのに時間がかかったらしい。ストーブが埃を焦がしたような匂いが私の周りにだらしなく居座っている。しばらく動きにならない。鈍い匂いに似た気だるさが私の目覚めを抑えに抑えている。

動きたくない。もう少しだけ…。無意識の間に私は黙りきった空間に再びまぶたを下ろさせた。

「……………」

歌か、台詞か、頭の中を不確定な型で言が回る。

変化をもたらさないこの腫れぼったい空間に私が帰るのは、自身の感覚とずれた冷たい懐中時計が九を示す少し前だった……。

第1（後書き）

よろしければダメ出しの御言葉や暖かい御言葉等、お聞かせ下さ
い

次回も足をはこんでいただければ幸いです

第一 DOOR(前書き)

私はゆっくりと不器用に行動を始める

第一 DOOR

私を起こしたのは、痛みだった。

この空間の雰囲気に見合った、鈍い痛み。私は座ったまま無理に壁にもたれていたのに気付いた。ゆっくりと身体をおこすと共に一つ大きなびをした……。

よしよし、目が冴えてきた。私はようやく辺りを見渡した。ここは、電車のようなだ。大分古いのか、さびがちらほらと模様かのごとく散らばっていた。低い天井には橙色のドーム型の電灯がはめ込まれぼんやりと私を包み込んでいた。そうして私は何度か同じ景色を眺めてからやっと問が出た。

私は、何故ここに？

その事実を私をその場に打ち付けた。当然と言えば当然だ。しかし判らない。何も判らない。思い出せないのとは違う。あきらかに私は「ここ」にいるべきでないような気がした。確信などない、直感が、本能が、私を固めた。

ふと、扉が目に入る。少し考えれば、こんな館のような観音開きの扉は電車には似つかわしい。なんだここは。私は何をしている。

頭の中を意識が駆け巡るのに逆らって、私の手は扉に届いて
いた。

開けようとしていたにも関わらず、嘲るように楽に引かれた扉に、
私の五感は奪われたようだった。

第一 DOOR（後書き）

ダメ出しの御言葉、暖かい御言葉等、お待ちしております

次回も足をはこんでいただければ幸いです。

第一 BLACK (前書き)

開かれた新たな空間が語るのは希望か、新たな謎か……。

第一 BLACK

私は扉を少しずつ開いた。

少しずつ、少しずつ、焦らず、恐れず……。

対象的に震える両手は私に警告しているかのように思えた。しかし、それを考えたところで私の歯車は止まらない。

大袈裟なくらいに大きく開かれた、厚みのある二枚の錆び付いた観音開きの板は、滅多なことでは閉まらない風だった。

9

開かれた先には四角い木箱が一つ、新たな小さい空間の中央に座り、その上には

一丁の、拳銃……

私は何の反応も示すことも無かった。反応も出来なかった、というのが正しいだろうか。私は重々しい反射光を見せる黒い筒に睨まれ

たまま、止まった。

何物も音のなることのない空間で私に唯一語りかけるのは、今までの沈黙から色を大きく変えた生暖かい空間の感触だけだった。

第一 BLACK（後書き）

よろしければダメ出しの御言葉、暖かい御言葉等お聞かせ下さい。

次回も足をはこんでいただければ幸いです。

第一 OCCUR(前書き)

向く方にしか、道は拓かないのだろうか。

第一 OCCUR

私は初めて見たはずのそれに対して、はるか前から目にしてきたような感覚に陥った。

これは命を断つもの、その認識が私の足元を完全に釘打った。それほど長く、この冷たい雰囲気の木箱と向かい合っていたわけではないが、私に恐怖感を植え付けるには十分な時間であった。

何のタイミングがあったわけでもない。唐突に何かしなくてはと身体が私を突き動かした。先と同じようゆっくりと扉を動かす。軋む感触はあった気がしたが扉は声もあげずに閉ざされた。

また褐色の座席に身体を沈めた。手に血潮が波打つのを感ずる。かなり強く扉の手すりを握っていたのだろうか。それとも、まだ私が落ち着きを取り戻すに至らないからか。いや、今になってはどうでも良い。じっとしていよう、それでいい。私は完全に思考を止めてしまった…

……つもりではあったが無意識に逃げ道を探すだけはしていたのだろう。おもむろにポケットから懐中時計を取り出した。光沢を失ったそれにまた気が沈みかけたが、わざわざ丁寧に蓋を開いた。八時五十九分。この時、私は時間感覚もはつきりとしなかったが、もはやどうでも良かった。

じっと引き寄せられるように見つめた。九時になったところで何かあるわけでもない。むしろ、やっと見つめた逃げ場を失いそうだった。しかし、目を弱々しい秒針から話すことができなかった。

五十七秒…、五十八秒…、五十九秒……

思わず目をつむった。

『 ツー!! 』

まぶたをこじ開けた時に、私をとらえたのは、無の空気でも、秒針でもない、拳銃の置かれた扉でもない

足元に拓かれた、階段……

もはやこの空間は、私に思考の猶予を与えてはくれなかった……。

第一 OCCUR（後書き）

よろしければダメ出しの御言葉、暖かい御言葉等お聞かせ下さい。

次回も足をはこんでいただければ幸いです。

PROGRESS...? (前書き)

私は動く。動かすものが何であっても……

PROGRESS…?

きっかり九時……。そして、現れた床下にのびる階段。完全に不意打ち。何もわからなかった。私はだれかに馬鹿にされているような気さえした。一体どうなっているのか、焦りを感じた。しかし、今の私は意外なほどに冷静だった。一つずつ解き明かせば……。何故そう思えるのかもわかる。私は、考え始めていたのだ。

何故、このような事が起こったにも関わらず冷静なのか。それは、いくつもの直感が無理にそうさせたのもある。しかし、大きな理由が二つ…。

一つは、逃げ道を失わずに済んだから。例えこの階段をおりた先が期待したような場所でなくとも、やるべき事ができただけで、とても楽だった。

そして、二つ目。これが大きな理由。これが現れた時間。そう、『現れた』のだ。拳銃の扉が出た後に私がいくら悲観的になつていようと、この大きく穴が空いたような床に気付かないはずがない。忽然と現れた。タイミングは、九時ジャスト。時間に合わせて現れたとしか思えない。

迷わなかった。すぐに階段を降り始めた。出口がなくなつて……。いやな考えはすぐに振り払えた。

しかし、私は愚かだった。ここで『突然、下への階段が現れる』という状況のいかれように気付くべきだったのだ。

私は新たな可能性に心の踊るような感覚さえいただいていた……。

PROGRESS...? (後書き)

よろしければダメ出しの御言葉、暖かい御言葉等お聞かせ下さい。

次回も足をはこんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942z/>

ヨルのデンシャ

2011年12月11日09時49分発行